



寺田 治さん：1973年3月27日生。山梨県生まれ、埼玉県農業大学校卒業後渡米シワシントン州の牧場で1年間酪農実習、帰国後叔父の加藤忠司氏が経営する南加藤牧場で就農を開始する。現在は牧場長として農場を取り仕切る傍ら、埼玉県酪農協会牛部会副会長を務める。加藤牧場は69年所沢市から現在の日高市に移転、92年にフリーストール牛舎と8頭ダブルのミルクングパーラーを設備、経産牛140頭（搾乳牛130頭）育成牛60頭を飼養、年間乳量1,300ℓ（F3.8%-P3.2%-SNF8.6%）を生産する。95年にアメリカから優良基礎牛2頭を導入したのに始まり、国内外の良血を随時導入し、日々改良に努めている。EX牛4頭輩出、共進会にも毎回出品し、2013年の関東BWショウではクラス2位入賞を果たした。95年には加工プラントを整備しアイスクリーム店を出店、現在はアイスその他に牛乳やチーズ等の乳製品加工販売を手がけている。また、近隣の子供たちの酪農体験や就業体験プログラムを受け入れ、農業高校や大学に研修の場を提供し、酪農に興味を持った若者たちを育てている。

は頭の隅にあります、中々忙しさにまかしてしまっていて実行できません。それに春先の大雪で今は飼料庫や堆肥舎が潰れて見栄えが悪いですね。

プラントに持って行く生乳の量は季節によって多少違いますが、1日に300ℓ、生乳の1割ほどです。

## 青刈りコーンを毎日与える事で、猛暑を克服できている。

～ここは熊谷市に代表されるように猛暑で有名ですね。

たしかに熊谷にも近いし、暑い地域です。他はどんなに暑くても朝晩は気温が下がるのですが、ここは下がりがありません。夕立が降ると5度くらい下がるのですが、1週間

も降らないと辛いですよ。

暑熱対策としてはファンを回し、ミストも使いますが、以前は暑さで1頭か2頭は死んでしまう牛がいたんです。

しかし、6、7年前からコーンの青刈りを7月1日から11月末まで毎日15～20kgくらい与えているんです。その日に刈ってきて、ミキサーに入れてTMRとして与えています。このおかげで夏場の食い込みが極端に落ちなくなりました。去年はこれに飼料会社で出している、食べさせる事で血液の循環を良くして体温が1度下がるという餌を与えましたが、効果は少しあるのかな。それよりも青刈りコーンの効果の方が大きいと思います。食い込みが落ちないので牛が持つのです。これで暑さで死ぬ牛はいなくなりました。

～TMRの詳しいメニューを教えてください。

冬場はスーダン5.5kg、ルーサン5.0kg、ビール粕5.0kgが通年で、これにコーンサイレージ6.0kg、配合9.0kg、ビートパルプ、自家配のコーンと大豆の圧ペン、大豆粕が加わります。夏場は青刈りコーンがサイレージの代わりに入るので、スーダン3.5kg、ルーサン3.2kgと草を減らし、配合も8.0kgです。TMRは1日2回給与します。毎回食べ切るように与えています。よくお客さんから、これしかやらないのと言われますよ。夕方は5時に給餌しますが、3時頃には食槽に無い状態になりますからね。でも、食べ切る事により、次の給餌の時に食い込みが良くなります。少し余っているようなら減らしたりと、加減しています。

フリーストール内は2群で、泌乳後期の牛は分けています。後期の牛たちは1日1回の給餌です。内容は多少違いますが、最盛期の群には200ℓくらい加水しています。基本が乾草で、高水分の物はサイレージとビール粕が加わるくらいですから。

7月からは青刈りコーンの収穫です。どうしても雨などで刈りに行けないとか、機械の調子がとかはありますが、作業できない日はトータルで5日ありません。ほぼ毎日刈りに行きます。コーン畑は30haありますが、そのうち12haは2回収穫しますので、42ha分の計算になります。5月には3haエン麦を収穫します。これも青刈りで与えます。

畑は牧場の周りに10haで、あとは隣町の水田の耕作放棄地が15haまとまってあります。だからスタッフの1人はそこまで刈り取りに行く仕事に専念します。1度の作業で3時間くらいかかりますし、場合によっては2回行かなければなりませんから。もう1カ所は市内ですが、少し離れた所に9haほどあります。耕作放棄地は畑が良くないので、なるべくバックサイレージ用にして、近くの手入れした畑を青刈り用に使っていますが、どうしても遠くの方の畑も青刈りしなければなりません。ハーベスターは2台ありますが、毎日の作業なので大変ですね。